

2020（令和2）年度 早稲田大学 法学部 入試問題 第4問 解答例

問二十一 ロ

- * 傍線部の「逆接語→述部」の構文をもとに、各選択肢と照合して絞る。「事実とは違うもの」＝「悪意＝軽蔑の感情」であるから、**ロ・ハが要件を満たす**。
- * ハは「声によって知覚を明確化」が明らかに不適。

問二十二 ニ

- * 主題の指示内容は全選択肢共通。述部「言葉から始原の声を祓う」と各選択肢とを照合する。「始原の声」＝「悪意＝軽蔑の声」なので、それを「祓う」に該当するのは**ハ・ニ・ホ**である。
- * 「始原の声」のニュアンスを正しく反映しているのは、**イ・ハ・ニ**である。
- * 「声」と対義的な「概念的言語」の説明が「装飾のいいまわしや精密な順序の手続き」であるから、それを「声」の側とする**ハは論外**。

問二十三 ホ

- * 主題「そうした振舞」の内容は、ほぼ全選択肢が対応し、「それは思考ではない」といわれ＝「そうではなく」は全選択肢共通であるから、述部内容「思考と呼ぶべきものが別にある」と選択肢を照合する。「言語はたえず変遷」「語られるごとに、たえず作りなおされている」「改変し続ける」等に対応するのは**ホ「言葉のものも変わっていかざるをえなくなる」のみ**。

問二十四 イ

- * 主題と述部「語るとは、～新しい世界の見方をもたらそうとする」はほぼ全選択肢が対応。よって、「従来の言語によって動かし難い事物の一般名詞として規定されている意味（センス）を、[新しい出来事のために解放し]」の本文内容「語るべきことがあるのに、既存の言語がその表現を供給できない[から言語は改変される]」が正解の要件であり、**イのみが適**。
- * 「一般名詞として規定されている意味」は「概念的言語」の一般的意味のことで、**ニの「事物と一対一の関係にある動かし難い意味」は明白な誤り**。これでは「固有名詞」である。

問二十五

言語の起源は現実の空間において情緒とともに発せられた声とその情緒の始原的記号となった点にあり、その後に概念的意味を表し理性的に使用される概念的言語が発達した。新しい世界の見方をもたらす創造的な真の思考を語る言葉は、既存の概念的言語では供給できず、言葉を語る人間の思考とともに改変され続ける。この真に思考する創造的な言葉を語る実践が、筆者の言う思考の現場である。（一八〇字）